2018年2月10日発行（偶数月10日発行）第4巻1号（通巻20号） ISSN 2188-9724

地域包括ケアをリードする

医療と介護Next

Vol.4

2018 No. 1

特集

アラナイ・アラハンの医療と介護

90歳前後

100歳前後

新連載 ケアの苦悩とジレンマ
尊厳に反する行為とは

第2特集スタート！
策定から3年
訪問看護アクションプラン2025

MC メディカ出版

制度の隙間に支援を届ける懐深いサービス

「里・つむぎ八幡平」の運営施設はどこも、認知症があっても障害があっても、笑顔で過ごせる地域の居場所

地域密着の介護現場から

第18回

共生型デイサービス等

特定非営利活動法人 里・つむぎ八幡平（岩手県八幡平市）

取材・文／宮下公美子　写真／川代大輔

民家を活用した障害者と高齢者の共生

一軒家の玄関を開けると、大きな笑い声がした。デイルームのソファに並ぶ笑顔の持ち主は、高齢者、職員、それに障害者もいる。ここは、特定非営利活動法人「里・つむぎ八幡平」（以下、「里・つむぎ」）が運営する「まるごとケアの家 里・つむぎ」（以下、「まるごとケアの家」）。理事長の髙橋和人さんの実家を改造した民家で、10人の高齢者と3人の障害者が共に過ごす共生ケアの場だ。認知症対応型デイサービスに住宅型有料老人ホームを併設し、さらに障害者の日中一時支援事業も行っている。

「日中一時支援の利用者には、精神障害と発達障害、知的障害が複合している人もいます。障害程度区分でいうと、5や6。最重度です。でも、認知症の高齢者たちがうまく相手をしてくれているのかな。何とか一緒にやっていますね」と、髙橋さんは言う。

共生の場は、高齢者もまた元気にする。

「要介護4で寝たきりだった女性は、ここで暮らしているうちに、日中はソファで過ごせるようになりました。そろそろ家に戻ったら？　と声をかけても、夫と2人の自宅よりここがいい、と言って帰らないんですよ」と髙橋さんは笑う。

共生による刺激でADLを維持・向上

「里・つむぎ」では、この「まるごとケアの家」をはじめ、4つの拠点を運営し、地域で支援を必要とする人を、さまざまな形で支えている。

「まるごとケアの家」に隣接する「白山（しらやま）の里」は、1階が認知症グループホーム、2階が障害者グループホームという共生型グループホームだ。高齢者9人、障害者5人が共に暮らす。

←↗「白山の里」は、認知症高齢者と障害女性の共生型グループホーム。ここの暖房は、自然エネルギーを活用した薪ストーブだけでほぼまかなえる。11月から翌年5月までフル稼働だ

↓「白山の里」に入居した妻に会いに1日おきに自転車でやって来る男性。夫婦共に90歳を超える

どの施設、デイサービスも「くもん」による認知機能訓練を行っている

↑〈上2点〉約4ヘクタールの畑は、農家出身の男性2人と、介護福祉士の女性が土壌づくりから作付け、収穫までを担当

スも使いながら生活している。

職員からいつでもケアを提供できるグループホームに比べると、ケアプランに基づいた外部のサービスで支援する住宅型有料老人ホームは、柔軟な対応が難しい。必要十分なサービス提供をしていると、経営的にも厳しいものがある。

そこで高橋さんは今、余裕をもってタイムリーに総合的なケアを提供するため、「ぱんたれい」をグループホームに転換することを検討中だ。

「しかし一部の居室は、有料老人ホームのまま運営します。そうでないと、様々な事情を抱えた方が入居できませんから」と高橋さん。支援の隙間に落ちる人をなくしたいという明確な意思が、そこにはある。

古民家をデイに活用、年代物の設えが力を発揮

「里・つむぎ」がサービス提供を通して取り組んでいこうとしているのは、一つは、互いに助け合える地域社会づくり。もう一つには、空き家や古民家、自然エネルギー、農業など、地域にある資源の見直しと活用だ。

「里・つむぎ」が「まるごとケアの家」に続き、2番目に開設したのは「古民家デイ なつかしの家」(以下、「なつかしの家」)。築100年超の古民家を活用した定員15人の地域密着型デイサービスだ。元は商家だったというこの古民家では、吹き抜けの茶の間に設えられた立派な神棚が利用者を見守る。100年の時を経て飴色に染まった梁や建具は、今どきの家にはない、独特の温もりを醸している。こうした古民家の〝装置〟としての力が、認知症介護では力を

↑デイルームの隣室にはターミナル期の入所者がみんなの笑い声に包まれて過ごす

↑「まるごとケアの家　里・つむぎ」では高齢者も障害者も一緒に「きらきら星」の合奏の練習中。和気あいあいとした雰囲気で笑い声が響く

←↓認知症対応型デイサービス+有料老人ホームの「まるごとケアの家　里・つむぎ」は、理事長の高橋さんの実家を改築した、築45年ほどの民家。懐かしい雰囲気だ

障害者は、日中は就労支援事業所や日中一時支援サービスを利用。帰宅後の時間、皿洗いをしたり、テレビを見たりして、高齢者と時間、場所を共にする。

「互いに相手をいたわる声かけをしたり、取り組む作業を障害者がリードしたり。そんな関わりがいい刺激になって、協調性を高めたり、ADLの維持・向上につながったりしていることを感じます」と高橋さん。

実は介護保険法では、グループホームで高齢者が障害者と同じデイルームで過ごすことを認めていない。この地域の介護保険事業を管轄する盛岡北部行政事務組合は当初、同一建物の1、2階を使って高齢者と障害者のグループホームを運営することを認めなかった。高橋さんは、事務組合と粘り強く交渉を重ねることで、非公式ながらこの取り組みを理解してもらったという。

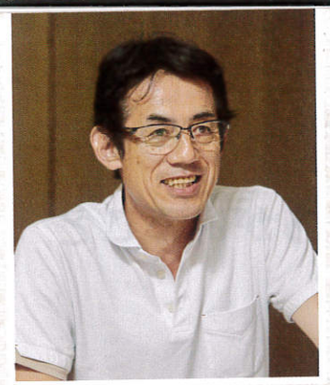
2018年度の介護保険法改正では、共生型サービスが制度化される。しかし、その対象はデイサービスや訪問介護、小規模多機能型居宅介護とされている。グループホームでの共生型サービスの扱いについては、17年11月現在、まだ不透明だ。

有老を一部残し GHへの転換を検討

「里・つむぎ」では、このほかに暮らしの場として、住宅型有料老人ホーム「ぱんたれい」を運営している。制度の隙間で支援を受けにくい人たちを受け入れるためにつくったのだと、高橋さんは言う。

「たとえば、64歳で足に障害があり、車いすで生活している方。この方は日常的に支援が必要ですが、介護保険のサービスは使えません。障害のグループホームに入れないと、なかなか受け入れ先がないんです」

今は「ぱんたれい」の職員が日常生活を見守り、障害サービ



特定非営利活動法人里・つむぎ八幡平の理事長兼統括施設長を務める髙橋和人さん。20種類以上の職業を経験し、社会福祉法人事務長として特別養護老人ホームの立ち上げを経験後、独立した

DATA	
名称	特定非営利活動法人 里・つむぎ八幡平
所在地	岩手県八幡平市 田頭2-10-5
代表者	理事長兼統括施設長　髙橋和人
設立年月	2011年4月
運営事業所	まるごとケアの家　里・つむぎ／古民家デイ　なつかしの家／共生型グループホーム　白山の里／住宅型有料老人ホーム　ぱんたれい
関連法人	一般社団法人すばる（障害グループホーム　すばる／すばる　農業部門）

←↓住宅型有料老人ホーム「ぱんたれい」では、制度ではカバーできない人も受け入れている。「ぱんたれい」とは「万物流転」を意味するギリシャ語

↓→築100年を超える古民家を活用したデイサービス「なつかしの家」。髙橋さんはここをいずれ古民家レストランにすることを構想中

↓女性専用の障害グループホーム「すばる」。長年、精神科の病院に入院していた人も、外部の障害サービスを利用しながら、ここで落ち着いた生活ができている

↑「なつかしの家」のアクティビティ。3色棒を使った握力と敏しょう性、認知機能のトレーニング

発揮すると、髙橋さんはいう。

「家の中は、ご利用者が子どもの頃に親しんだ雰囲気のままですから、やはり安心するんでしょうね。自宅にいるとすぐに外に出て行ってしまう認知症の人も、ここに来ると穏やかに過ごせています」

以前、アンティーク関係の仕事をしていた髙橋さんにとって、歴史ある家々が次々と壊されていくのを見るのはつらいことだった。何とか残せないものか。そんな思いから、土地込みで売りに出ていた「なつかしの家」の古民家を知人に購入してもらい、賃料を払って運営することにした。気になる古民家はほかにもあり、借り受けることができる機会を今も窺っているのだという。

広大な農地を利用し農業と福祉の連携を

このほか、関連法人である、一般社団法人すばるでは、16年に障害グループホーム「すばる」を開設。精神科病院を退院した人たちの地域復帰の場を用意した。

「低所得で、日常生活にほとんど支障がなく、しかし精神疾患があって見守りが必要な高齢者などは、なかなか受け入れ先がないんです。それに、障害者の就労と組み合わせて、農福連携に取り組みたいとも考えていました」

髙橋さんの実家は、酪農と稲作の農家だった。「まるごとケアの家」に姿を変えた実家の周囲には、4ヘクタールを超える農地をもつ。その農地を活用し、今は、農家出身の男性2人と、介護福祉士の資格を持つ女性が半分介護、半分農業に携わり、農作物づくりに取り組んでいる。

ズッキーニやアスパラ、ピーマン、レタス、トマト、ナス、インゲン、カボチャ、ジャガイモ、サトイモ、トウモロコシなど、栽培する作物は多種多様だ。このほか、今年から〝八幡平バイオレット〟という、この土地独自のニンニクの栽培も開始した。土地の名産に育てていきたいのだと、髙橋さんは言う。

農福連携についていえば、16年に障害者就労継続支援B型事業所を開設し、1年間、農作業による就労支援に取り組んだ。しかし、これは思ったように利用者を集めることができず、17年6月でいったん閉鎖した。

「少し読みが甘かったんです。悔しかったですね。ただ、この地域は農業が主産業なのに、実際に携わっているのは高齢者がほとんどです。将来的には農業と福祉を連携させなくてはやっていけません。それは最初から課題だと感じていましたから、仕切り直してまた取り組んでいきたいですね」

小規模多機能を開設聞き書きの教室も予定

今後は、まず農業をしっかりやっていきたい、と髙橋さんはいう。「里・つむぎ」の利用者に畑に出てもらったり、近隣の子どもたちに農作業体験に来てもらって、この地域の交流人口*を増やしたり、さまざまな展開の可能性があると考えているからだ。

設立から、この4月で7年となる「里・つむぎ」。無資格、未経験からスタートした職員も多く、その自由な発想で、懐の深いケアの提供を行ってきた。4月には、「まるごとケアの家」の向かいに、新しく小規模多機能型居宅介護もオープンする。ここにつくる「地域交流室」では、高齢者の輝いていた日々のことを聞き取り、まとめていく「聞き書き」の教室を開く予定だ。髙橋さんは、そうした取り組みを起点に、地域住民が集まれる場をつくろうとしている。

ここから、「里・つむぎ」流の、さらに懐の深い〝共生〟がどのように創造されていくのか。楽しみにしたい。

*交流人口…地域の定住者の人数ではなく、その地域を訪れる人の数